
Daily

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D a i l y

【Nコード】

N 8 6 0 3 V

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

大切な仲間や先輩達と過ごす日常（Daily）は、いつの間にか僕にとっては掛け替えのない大切なものになっていた。

これは、そんな僕の、日常の物語。

スピンオフ作品 Another Daily、連載開始しました！宜しければそちらもご覧下さい。

また、感想やポイントを入れて下さると、主に作者が喜びます。
まあそんな訳で、宜しければお願いします。

プロローグ（前書き）

この作品は、私が初めて書いた作品です。今から約一年半程前に書いて、更にそれを今から一年ぐらい前にリメイクしましたが、今見るとやっぱりネタが古かったです。

ぶっちゃけ、高校入学の為の受験勉強から逃避する為に書き始めたのがきっかけだったりします。まあ結局志望校に落ちたわけですが。当たり前ですね。

そんな訳で（？）このシリーズのストックは他の連載作品に比べ多いので、基本的にこちらの更新が主となります。

本編とは別にスピノフだとか番外編のショートストーリー的なものもあつたりするので、まあそこら辺もおいおい投稿していこうと思います。

それでは、どうぞお楽しみ下さい。

プロローグ

僕は右手に持ったロングソードで斬り付けつつ彼に言った。

「それでも、僕は！守りたいものがある！」

それを槍で弾き、そのまま彼は突きを放ちつつ彼は叫んだ。

「譲れないものはこちらにもある！」

その時、

「もつと感情を込めなさいっ！」

部長が吠えた。手にはメガホンを持っている。僕たちはやれやれ、とばかりに肩をすくめると、練習を再開する。

ここは演劇部。現実と虚構が入り混じる場所。

なんて。

リアルリアルと虚構バーチャルの区別なんか、僕にはつけることが出来ない。今僕たちが存在するこの世界が現実リアルである、と証明する術を持っていないからだ。仮にこの世界が虚構バーチャルとしても、それを知らない者はこの世界が現実リアルだとしか思わないだろう。

なんて。そんな益体の無い事を言ったところで特に何の意味も無いのだけれど。

まあ取り敢えずそんな感じで。毎日というのは有意義な事だけじゃなくて、そんな無駄な事の積み重ねでも出来ている。

それが僕達の日常（Daily）なんだ。

第一話 その1 (前書き)

元の文章からかなりあちこち手直ししました……。

…地味に疲れた……。

第一話 その1

ここ、成華学園演劇部には、6人の部員がいる。まず、部長の相沢華先輩、高校三年生。そして美影優先輩。美影先輩ではなく、優さんと呼ばれている。美影先輩、と呼ばれるのが嫌だから、だそうだ。そしてもう一人、三年生には先輩がいる。神林曆という、男の先輩だ。この部活で男子は、僕と曆先輩だけだ。二年生は、僕と鈴木竜也以外にもう一人、春原蘭という女子がいる。スポーツが得意で、演劇部に何故いるのか不思議なヤツだが、本人によると「スタントがやりたかった」ということらしい。一年生は、天宮可奈という女子が一人いるのみ。無口で、いつも本を読んでいる。一人称が ボク の眼鏡っ娘。

まあ前置きはそのぐらいにして、そろそろ部室に入ろう。

「こんにちは」

挨拶をして部室に入ると、そこには既に部長と優さん、天宮の三人がいた。部長が僕にチョイチョイ、と手招きして言った。

「竜、早く来なさい！そうしたらチョークスリーパーかけてあげるから」

「誰がそんなこと言われて行きますか！」

演劇部というのはボケとツッコミのキレが必要な部活である。まあ、キレはともかく、そういう機転は必要だ。例えば何らかのアクシデントが発生して咄嗟にアドリブをやるとき、即座にリアクショ

ンを返すことは大切な事である。嘘だけど。今勝手に考えただけだけれど。

言い忘れていた（書き忘れていた？）が、僕は部長には竜、優さんには竜くん、暦先輩には竜也、春原からは鈴木、天宮からは鈴木先輩、と呼ばれている。

「…コブラツイストでもいいわよ？」

「それも嫌です！」

そういう問題じゃない。

「本音はさておき」

「冗談じゃない!？」

「台本を選んでいるのよ、竜。あなたの意見を聞かせて頂戴、参考にしたいから。ああその中から選んでね」

ソファアの上で足を組み替え、部長が言う。珍しく真面目にやっているらしい。よし、僕も台本を……………。

「……………」

「どう？私的にはその涼○ハルヒの憂○がいいと思うのだけれど」

「良くないですよ！それはいろいろと駄目です！」

「いいじゃない、お金取るわけじゃないから著作権的にも何とかな

るし、多分」

「多分!？」

「私だって著作権の話をきっちり正確に覚えてるわけじゃないわよ」

「というかそもそも、高校演劇で八ヒやるってどうなんですか？」

「ダメって誰か決めたの？」

確かに誰も決めてはいないが。

「まあまあ、落ち着きなさい、竜。冗談よ」

「で、ですよね……」

「40%ぐらい」

「60%は本気ですか!！」

半分以上本気かよ。それは冗談とはいわねえ。

「ああ、間違えたわ。本気だったのは80%よ」

「上方修正!？」

聞きたくなかった。

第一話 その2

すぎるように優さんを見るも、ニコニコ微笑んでいるだけで、ツッコミを交替してくれそうにない。無口な天宮は元から戦力外。その時、

「おう、どうした？」

ガラリとドアを開けて、暦先輩が入って来た。ナイスタイミング、暦先輩。僕はこれ幸い、と話題を変える。

「暦先輩、春原を見ませんでしたか？」

「ああ、あいつなら転んで膝をすりむいたから、少し遅れるってさ」

「ああ、そうなんですか」

良かった、こっちは普通の会話だ。

……ってあれ？あの無駄に運動神経抜群の春原が、転んだ？何か嫌な予感が……。

「なんでも、バナナの皮を踏んで階段の踊り場から落ちたらしい」

「何故バナナの皮！？」

聞くんじゃなかった。どこの戦○ヶ原さんだよ。

「でも落ちる寸前で受け身とったから、擦り剥くだけで済んだらしいけどな」

僕はため息をつく。しかしまあ、バナナの皮とはベタな真似を……。ベタというより、最早古典的と言った方がいいかもしれない。

ていうか何故学校にバナナの皮が落ちてるんだろうか。

ところで、

「そついえば部長、なんでもう台本選んでるんですか？まだ4月なのに……」

確か去年は5月中旬辺りだったハズだ。そんな僕の質問に、優さんが答えてくれた。

「それはね、竜君。たまには真面目にやらないと、部活日誌に書く内容がなくなるからよ」

「……そこら辺の事情はあまり聞きたくなかった……」

「それに、たまには真面目ってどういうことよ、優。私達はいつも真面目に雑談しているじゃない」

部長も文句を言う。

「いや、真面目に雑談って……」

ギスギスしてそう。というかそれは討論の類ではないだろうか。そもそも真面目である時点で雑談じゃ

ねえし。

と、ここで、

「遅れましたあゝ」

演劇部最後の一人、春原蘭の登場だった。いや、だからどうした、というわけでもないけれど。

「やあ、春原」

「今まで同じクラスと一緒に授業を受けていたのに、今更 やあもないでしょう」

「バナナの皮はどうだった？」

「…ふえ!？」

あ、春原の顔がだんだん赤くなってきて、アワアワしてる。そして、曆先輩を睨み付けている。曆先輩は春原に睨まれて目を逸らした。わざとらしく口笛を吹く曆先輩。誤魔化すの下手だなあ…。

と、ここで部長が、

「ところで蘭、あなたはこの中でどの台本がいいと思う？」

助け船を出した。春原はん？と振り向き、こう言った。

「いや、それラノベだし！台本じゃないし!」

「もつともな意見である。」

「でも、強いて言うなら…灼○のシヤナかなあ…」

春原、そこでおまえもノるなよ。まあ、今更この部長に反論しても無駄だっということはわかってる

が。仕方がないので、僕も手近にあった とある○術の禁書○録を読む。実は未だ読んだこと無かったんだよな…。

…おお、これ面白い。

第一話 その3

10分後。

「そろそろ皆決まったでしょうから、それぞれ選んだ本を出しなさい！ いっせーのせ、の合図でいくわよ。それ、いっせーのーせ！」

ドドン。僕、とあ〇魔術の〇書目録。部長、〇宮ハルヒの〇鬱。
優さん、デ〇ノート。暦先輩、鋼〇の

レギオス。春原は灼〇のシャナで、天宮は……。機〇戦士ガン〇ム
ダブルオー
〇〇。……ちよっと待て。

「なあ天宮、それをどう再現しろと？」

頭痛をこらえて僕が聞く。すると天宮は、

「着ぐるみを着ればいいではないですか」

と言った。

「発表するのは7月なのに、その暑い中着ぐるみを着ると？」

「『成せば成る、なさねば成らぬ、何事も』と言いますし」「何でもやりゃあいってもんでもないだろう」

熱中症になる確率大だ。

「で、どうするんだ？ 相沢。このカオスなラインナップの中からど

れを選ぶ?」

暦先輩が問うと、部長はこういった。

「多数決でいくわよ!一人一票で、やりたい台本の時に手を挙げて
!」

結果、全てに一票ずつになり、決まらないというオチがついた。
…やっぱりか。

「で、どうするの、華ちゃん?」

「どっしりようねえ……」

おい。部長が放った、優さんからの問いへの無責任な答えに、思
わず脱力。

そして、部長へ暦先輩や優さん、春原、そしてなんと普段無口な
天宮からも非難が集中する。と、ここで部長が

「うるさいうるさいうるさあ〜いっ!」

キレた。しかも逆ギレ。恥ずかしさからが怒りからか顔が真っ赤
になっている。

「じゃあ、あなた達に何かいい意見はあるの!??」

部長のカウンター攻撃に、僕たちは全員沈黙した。

そして、口を開いたのは、暦先輩だった。先輩は、重々しい口調で言った。

「うん。無いな」

「何で堂々と言ったの、暦!？」

ダメじゃん。たぶん全員的心が一つになった瞬間だった。感動は欠片もありやしない。

で。

「どーすんですか、本当。このまま先送りにでもしますか？」

僕が問うと、

「まさか。そんなオチは問屋が許しても私が許さないわ」

「華ちゃん、たぶん問屋が卸さないの間違いよ」

「こ、細かいことは気にしないの、優!」

「んで、どうするんだ?」

暦先輩が言う。

「このまま」

「暦先輩、ストップ!」

「いきなりどうしたのよ、鈴木？」

「いや、このままだと無限ループしそうな気がして……」

「あー。確かに……」

「で、どうするの、華ちゃん」

「あんたらわざとやってるだろ！」

第一話 その4

「あら失礼ね、竜君。私はいつでも真面目よ?」

「嘘だッ!」

「時代はもう、ひ○らしからうみ○こに変わったわよ、竜」

「う○ね!、まだ読んでないんですよ」

「あら、小説派?私はアニメ派よ」

「そうですか。で、何の話でしたっけ」

「ひぐ○しのなく頃に と うみね○のなく頃に よ」

「少なくとも、それではなかったはずですよ!」

「じゃあ、劇の台本の話だったかしら?」

「それだ!っていうかじゃあって何ですか、じゃあって!」

「日本語」

「知ってるよ!」

しまった。ついツッコミに熱中するあまり、タメ口になってしまった。

と、ここまで会話を繰り広げたところで、

「あ、あの……………」

控えめな声が出た。声のした方を向くと、

「そもそも、台本をライトノベルから選ばうとした時点で、色々間違っていた気がするんですが……………」

「天宮が喋った…！」

「こ、コメントそっちですか？て言うか、さっきも話したじゃないですか！」

「何、気にすることはないさ。細かい事を気にしたら負け、それが俺達、リールバスターズだ！」

「さりげなく混ぜとってる!？」

「失礼、もう一度。それが俺達、成華学園演劇部だ！」

「…は、はあ……………」

「俺達は皆、その場のノリで生きている！」

「曆、さり気なく私達まで巻き込まないでよね」

「…悪かった」

「て言うか、それこそその場のノリで生きてますよね、曆先輩って……」
「くっ……！春原に言われると
は……」

「失礼な。私はまともですよね？」

「」「」「」

「何で皆して、気まずそうに顔を背けるんですか！？」

「……無自覚って、怖いわよね」

「ゆ、優さん！？」

「分かったよ。春原はまともだ。それで、いいですよね？」

「」「」「」「いいとも！」「」「」

「な、納得いかないっ！」

「どこが？」

「皆、妙に微笑ましい感じになってることも気に入らないし、何より笑って〇いとも！ 風に言われた事が何か嫌！」

「笑っていいとも！ を馬鹿にするな！」

「してないわよー！」

1時間後。

「さて。台本どうする？」

「そうね……、ライトノベルは止めておきましょうか」

「この劇なんてどう？人数的にもいい感じよ？」

「うーん……。ストーリーがいまひとつねえ……」

「こんなのはどうだ？」

「どれどれ。……これ、任侠物じゃない！どこから出てきたの、これ！？」

「その棚」

「こんなの有ったんだ！」

「俺もびっくりだ」

「それで、結局どうするんですか？」

「もういつその事、台本を私達で作っちゃおうか？」

「」「」「」「おーっ！」「」「」「」

「何か一致団結してるし！」

「で、台本は誰が書くんだった？」

第一話・了

第一話 その4（後書き）

一番最初に書いたものと比べると、かなり色々変わってます。もはや殆ど別物と言って良いのではないでしょうが。あれです、日本のアニメがハリウッドでリメイクされる感じですか。みんなバタ臭い顔になりますよね……。決して嫌いではないですが。

D a i l y S S ! 0 1 (前書き)

D a i l y を補完したりしなかったりする番外短編シリーズ、スタートです。まあ大抵、本編に何も関係の無いところで始まって終わりますが。

サブタイトルの読み方は「デイリー えすえすっ！」です。「えすえすっ」の部分が平仮名であることに特に意味はありません。「SS」の意味は、「シヨートストーリー」「シヨートシヨート」「サブストーリー」等、色々なものの掛け言葉です。それではお楽しみ下さい。

ある日突然、部長が僕にこう言った。

「竜、これから私のことをお嬢様と呼びなさい」

…はぁ？

「何故突然そんなことを？」

部長に聞く。すると部長は

「いつ、いいでしょ別にそんな事！な、何となくよ、何となく！」

と、顔を赤らめて言った。続けて、

「別に竜に言ってもらいたいとか、そんなんじゃないんだから！」

と言った。訳が分からない。僕は（またこのパターンか…）と思いつつも、

「はいはい。で、何の用ですお嬢様」

聞いてやる。部長が漫画やアニメに影響されるのは今に始まったことではないし、僕が流されて部長に付き合っただけであげるのもいつもの事だ。僕の台詞を受けて部長は、

「私の足を舐めなさい！」

と言った。僕、思わず絶句。うん、流石にこれは想定外のリアクションだ。そんな僕の顔を見て、部長は

「冗談よ、冗談。私がそんな事言うわけないじゃない」

と言った。僕は彼女の頬をむにゅっとつまみ、

「どの口がそんなことを言いますか!」

とツッコんだ。…部長の頬はやわらかかった。なんかこう、漢字の「柔らかい」じゃなくて平仮名の「やわらかい」っていう感じ。…伝わるだろうか？

閑話休題、僕が部長に

「何かそんな感じの本か漫画かアニメでも見たんですか？」

と聞くと凶星だったらしく、

「な、何でそれを…!」

と驚いたように言った。いや、何でと言われても…。

「部長、僕は貴女とどれくらい一緒に居ると思っっているんですか。もう3年近くになるんですよ？貴女の考えそうな事は殆ど知っているつもりです」

そう言つと僕はニコリと微笑み、

「分かりましたか、お嬢様？」

と言った。部長は

「ふ、不意打ちなんて卑怯よ…！」

と何故か赤くなりながら呟いた。…何の話だろう？先程はあんな事を言ってしまったが、こういう時の彼女の思考回路は僕にはさっぱり分からない。

「さて、もう気が済みましたか、お嬢様？」

と聞くと、

「うん、今日のところはもういいわ。また今度ね」

と言った。また今度があるのかよ！でも、彼女の楽しそうな顔を見ていると、僕も（まあいいか）と思えてきた。

D a i l y S S ! 0 1 (後書き)

今回のテーマは、「ツンデレって萌えるよな」でした。部長さん
こと相沢華さんは割とテンプレなツンデレさんです。作者的には結
構お気に入りなキャラクターなのですが如何でしょう。まあ、まだ
ろくに話が進んでないのでこの先の活躍に期待してあげておいてく
ださい。それでもメインヒロインその1です。

誤字脱字等にはかなり気をつけて書いてますが、この作品に限ら
ずもし見つけた方は、お手数ですが感想等を書いて送って頂けると
有り難いです。お願いします。

第二話 その1（前書き）

うわーい、宿題が終わらな〜い〜！

どうも、斎藤です。未だに自分のペンネームに違和感があります
……。

ええとですね、冒頭で述べた通りの事態の為、明日（8/28
00:00）辺りの更新が無いかも知れませんが、どうか御了承下
さいませ。ええ、身勝手だとは分かっているのですが。何分私も学
生なもので……。

こんな作者ですが、これから温かく、生温く、たまには絶対零
度の視線でも構いませんので見守っていただけたらな、と思います。

P・S・

…私はMじゃないですよ？念のため。寧ろ隠れDsとよく言われ
ry)

第二話 その1

さて、台本に関しては部長が「しょ、しょうがないわね、誰もやる人がいないみたいだから私がやってあげるわよ!」というツンデレ台詞と共に宣言したので、僕たちは生暖かい眼差しと共に彼女に一任することにした。

今はもう、新入生勧誘を主目的とした春の公演も終わっているの
で、僕たちは本格的にやる事が無い。僕たちは備品であり大道具でもあるソファーや椅子等に腰掛け、思い思いに好き勝手に過ごしていた。

：いや、一応これでもさつき発声練習とかやったんだよ？怠けていただけじゃなくて。

僕もその例に漏れず、この間からマイブームになっている「と○る魔術の禁書○録」を片手に、ソファーで寛いでいる。

この部室には、台本等を仕舞う本棚とは別にもう一つ本棚が存在する。そこには歴代の先輩方が収集したライトノベルや同じn……ゴホン、薄い本が数多く保管されている。まあ収集したと言ってもそれぞれが読み終わった本を持ち寄っただけなのだが。これが意外とかなり品揃えが良く、禁○目録シリーズも最新刊まで揃えてある。かく言う僕も別のシリーズの物を10冊程持ち込んだのだが。

そんな感じのグダグダとした空気のまま、本日の部活動が終了した。荷物を纏めて帰り支度をしていると、春原が声を掛けてきた。

「ねえ鈴木、この後って空いてる?」

一瞬、部長のいる方向から妙に鋭い視線と軽い殺気が放たれた気がするが、よく分からなかったのでスルーした。

「ん?ああ、問題ないよ」

「そう、良かった。じゃあさ、これから買い物付き合ってくれない?」

やけに嬉しそうな顔で春原が言った。僕の方も特に問題を感じなかったため、

「いいけどさ、それぐらい」と承諾した。

……部屋を出る時、部長がとても悔しそうな顔をしている事と、春原が不思議なぐらい上機嫌で勝ち誇った顔をしていたのが印象的だった。

……何をやっているんだろう、この二人は？

第二話 その2

ということだ。

「　　」

「…テンション高いね、春原……」

「うーん？そう見える？」

「そう見える、と言うよりもそうとしか見えない、と言った方が正しいだろうね……」

僕たちは今、学校の最寄り駅から更に3駅離れた、大型デパートにいた。そして……。

「…なあ、春原。……まだ買う気か？」

「もちろんよ！」

「そろそろキツくなってきたぞ？僕も」

「しょうがない、あと一軒見たら休憩して帰るわよ」

「そりゃどうも」

僕は大量の荷物を持っていた。もちろん、全て春原が買ったものだ。

……春原って、結構金持ち？

少し悩んだりしながらも、結構ほんぽんと買っていく。なんでも「バーゲンだから安い」という事だが、それでも既に結構な金額に達しているような。

まあ、僕が心配するような事でも無いのだけれど。

そして、春原が一通り店を見終わった後、僕たちは「少し休憩していこう」という事でデパート内にある喫茶店へと来ていた。持っている（持たされている）荷物を置き、一息つく。

「鈴木、何飲む？」

「アイスレモンティーで頼む」

「な……っ！まさか鈴木、レモンティー派なの？」

「そうだが」

それがどうした。

「レモンティーなんか邪道よ、昔のイギリス人はミルクティーで飲んでいたというのに！」

拳を握り、力説する春原。

「そうだったのか……」

それは知らなかった。

「それでも貴方は……レモンティー（その娘）を選ぶのねっ（泣）」

「唐突に脈絡の無いボケを言うのはやめてくれ、春原」

ツッコみづらいんだよ。

そんな雑談をしていると、注文していたものが届いた。僕はアイスレモンティー、春原はアイスココア。

二人でほぼ同時に飲み物を飲む。ずっと喋っていたので喉がカラカラだ。渴いた喉を冷たいレモンティーが潤していく感覚が心地よい。

第二話 その3

やはり僕はレモンティーが好きだ。コクのあるミルクティーよりも、さっぱりとしたレモンティーの方が好きだ。

あ、さっぱりしたレモンティーというのはやはりアイスでないと。うん、アイスは必須だな。

それと、ガムシロップは不要だと思うんだよな。ガムシロップ入れちゃうとベトつくから。レモンティーの爽やかさを損ねてしまう。

ああ、アイスのストレートティーというのも悪くないかもしれないな。

「……でもやっぱり、僕はアイスレモンティーが好きだ」
勝手に結論を出してみた。

そしてそれを聞いた春原が、
「ミルクティーの方が美味しいわよ！」

と言った。負けじと僕も、

「いいやレモンティーの方がいいね、絶対！」

「いいえ、どう考えてもコクのあるミルクティーの方が美味しいわね」

「ふん、あのさっぱりとしたレモンティーの美味しさが分からないなんて、春原もまだまだ子供だな」

ヒートアップ。

「な……っ!? ミルクティーの方が気品がある感じがするからミルクティー好きの方が大人よ！」

「……今お前、『気品がある 感じがする から』とか言わなかったか？」

「う、うるさいわね、多分きつと気のせいよ！とにかく、レモンティーなんて邪道なんだから！」

「邪道だろうと何だろうと！僕は！レモンティー（コイツ）が好きなんだッ！」

「うわ、無駄に台詞が格好いい!？」

「まあ、ルビを抜いて読むと馬鹿らし過ぎて呆れるがな」

「……ところで何でわたし達、こんな事で盛り上がってるんだろう」

「……」

「さあな……」

一気にテンションがクールダウン。

「ま、取り敢えず。そろそろ遅くなってきたから帰らないか?もう充分買ったたる?」

「うん。……じゃあ、家まで送ってくれる?」

「……ま、いいけどね」

「やった。じゃあ、早く行こー!」

ぴよんと跳ねると、春原はそわそわし始めた。軽く苦笑しながら、僕は春原に言った。

「会計済ましてからな。…先行つてていいぞ?」

そう言つと、

「ううん、わたしが払うよ。わたしの買い物に付き合つて貰ったんだし」

春原もサイフを取り出そうとする。それを手で制し、

「いいよ、僕が払うから。こついう時は、取り敢えず男の顔を立てておいてくれ」

そう言つと、春原は

「……う、うん……」

戸惑いながらもサイフを仕舞う。うん、それでいい。女の子に奢つてもらつというのは、何というか……ねえ?

会計を済ませ、喫茶店を出る。

「……春原、買い過ぎだろ……」

荷物の存在を忘れていた。いや、そこまで重くはないんだけど、嵩張るから大変持ちにくい。

「ほら、鈴木、行くよ!」

つか、自分の荷物なんだから一つぐらい自分で持てよ。

第二話・了

第二話 その3（後書き）

また遅くなってしまう……。本当にすみません、とイツキは謝罪の意を述べてみます。

…どうもこんにちは、斎藤一樹です。のっけから変なテンションですみません。それもこれも宿題という名の憎いアイツの所為です。夏休みを返せっっ！

いやまあ、夏休みに遊んでばかりいたからこんな事になっているわけですが。

さて、今回のテーマは「蘭ルート発生イベント」です。基本テンションの高い元気娘な蘭は、華と比べてまた違った魅力が出せていればいいな、と思います。

因みに、ストックがあるとか言いながら、今回の話は書き下ろしでした。更新が遅れたのもその辺りにも原因があります、と言い訳してみます。

今のところ、次回掲載がいつになるかは全く持って不明です。予定では新キャラ登場、な予定でいます。

…そこまで話が進むと、いいなあ……。…（溜め息）。行かなかった場合は、恐らくまた書き下ろしになると思われます。

乞うご期待！！ と言うことになっておいてください。

D a i l y S S ! 0 2 (前書き)

本編を補完したりしなかったりする番外短編、第二回です。

今回はD a i l yの舞台裏を描いてみました。設定としては、今回のこの話はD a i l y本編の約一年前、竜也や蘭はまだ高校一年生です。

竜也による一人称で話が進んでいく本編と異なり、SSはそういう決まりも何も無いので、これからもSSで舞台裏を描いていくことがあると思います。

ある日の放課後。部室には、まだ華と蘭しかいない。

「ねえ部長」

「どうしたの、蘭？」

「部長って鈴木のことが好きなんですか？」

「な、何よ突然」

「いえ、別になんとなくです」

「……それ、答えなきゃダメかしら？」

「はい」

「……どうしても？」

「どうしても、です」

蘭の真剣なまなざしに、思わずたじろぐ華。華は諦めたようにため息をつくと、

「わかったわよ、答えればいいんでしょ、答えれば」と少し自棄になって言った。

「ええそうよ、私は竜のことが好きよ。悪い!？」

「いえ、そうじゃなくて……。いや、やっぱり悪いかなあ……」

「何なのよ!」

「この際だから、はっきり言います。私も鈴木の方が好きなんです」

「な、何が言いたいなのよ……」

「これは部長への宣戦布告です」

「な、な……。」

「部長、貴女に鈴木は渡しません!」

二人はバチバチと火花が散りそうな勢いで睨み合う。

これが、初めて相沢華と春原蘭が鈴木竜也を巡りお互いをライバルとして認識した瞬間だった。

D a i l y S S ! 0 2 (後書き)

どうも、「宿題の山が倒せない」、斎藤一樹です。皆さん、宿題は終わりましたか？

…いや、夏休み最終日にする質問じゃあないことは分かってますとも。因みに私はまだ終わってません。この短編も以前書いたやつのコピペです。新規作成してる余裕がありません……。

さて、二学期が始まります。色々忙しくなってくるので、更新は今までと違い完全に不定期となります。それでは、なるべく早くまたお会いできることを願います。

第三話 その1（前書き）

どうも、松屋で昼ご飯にビビン丼食べてたときに物理のA先生
そっくりな横顔の男性が入って来て一瞬ビクツとなった一樹です。

いや、別に私がその先生の事が嫌いとかそういう事じゃ無いんで
すよ……？ただ、ちよつと苦手なだけで……。好き嫌いで言えば、
間違いなく好きなのですが。

まあさておき、第三話です。……書き下ろし、出来ませんでした
！予告通り新キャラ登場です。

最後に。今日であの東日本大震災から丁度半年が経過しました。
改めて、亡くなった方々への哀悼と、一日も早い復興をお祈りしま
す。

第三話 その1

四月の終わりのある日のこと、担任の先生に呼び出され、部活に遅れた僕は、小走りで部室棟内に入り、部室のある階へと登り、階段から廊下に出て。

不審な人物を発見した。

コソコソと窓から演劇部室を覗いている。警察とか呼んだほうがいいんだろうか。それとも、この場合は誰か先生を呼ぶべきか？ちなみにそいつは、外見で判断すると小・中学生といったところだが、おかしなことにこの学校の制服を着ている。…いや、本当にこの生徒なのだろうけど。

と、その不審人物がとてと歩いてきて、こついった。

「ん？あなた誰ですか？」

「こつちの台詞だ！こののぞき野郎！」

「あたしはただの見学者で、のぞきじゃないですっ！後、女なので野郎ではありません！」

「嘘だ！あれは覗きとしか言わねえ！」

まあ、野郎云々については認めるけど。

「っーかお前、誰だ？」

「あたしは猫島美玖といますっ！」

「お嬢ちゃんいくつ？小学何年生？」

「高校一年生ですっ！そしてあなたは誰ですか？」

「ああ、僕は鈴木竜也。演劇部所属の二年生だ」

「よろしくお願いします、薄先輩うすせんぱい」

「濁点が足りねえよ」

秋の七草じゃあるまいし。

っっていうか。

「普通に部室に入って見学すりゃいいじゃねえか」

すると猫島がにやりと笑ってこういった。

「こつやって覗いていたほうが、ありのままの姿を見ることが出来る、とは思いませんか？」

「うわ、何か無駄に正論っぽい！」

実際やってることはただの覗きなのだが。

第三話 その2

「んじゃあ、そろそろ僕は行くから。じゃあな」

「じゃあな、じゃないです！あたしの事、このままスルーする気で
すか？」

「当然」

全く躊躇わずに言い切った。だって面倒だし。

「このままじゃあたし、ただの痛い変質者じゃないですか！」

自覚はあるらしい。それは良かった。そのまま可及的速やかに消
えてくれ。

「演劇部の誰かに気付いてほしくて、かれこれ三十分もこうして覗
いていたというのに……」

「……おまえ、阿呆だろ」

リアクションが返ってこないからって、三十分は長すぎる。

いや、そもそも覗きの目的が見学ではなくなっている。

「そういえば僕達、何の話してたっけ？」

言われて、悩む猫島。…そうだ思い出した、部室に入ろうとした
んだった。

そ〜っと部室に入ろうとする僕。しかし、猫島ががっし、と僕の
肩を掴んで放してくれない。

…ああ、空が青いなあ……。

「露骨に目を逸らさないでくださいっ！」

「…ちッ…」

「今舌打ちしましたよねえ!？」

なんか、僕が誰かをイジるのは新鮮な気がする。ポケっていいな
あ…。僕、部長たちへのツッコミばっかだしなあ……。

さあ、どうポケようかな、と猫島を見ていると、何を思ったのか
猫島はポツと顔を赤らめこう言った。

「そ、そんなにあたしを情熱的に見ないでください…!」
「誰が見るかッ!」
「照れますう…!」
「人の話を聞けっ!」
「っつーか、やっぱりそつちがボケかよ。
「恥ずかしくて横隔膜がドキドキします」
「そりゃしゃつくりだ」
「ゾクゾクします」
「風邪か?」
「ウズウズします」
「何で!?!」
「ムラムラします」
「こつち来んな、痴女!」
「あれ、本当はどこがドキドキしていたのでしたっけ」
「それを忘れるなよな、胸だろ」
「胸だなんて、鈴木先輩いやらしいんですね…!」
「胸という単語にそこまで反応するお前のほうがよっぽどいやらしいわっ!」
「失礼な。これでも意外とあるのですよ?」
「うるせえ貧乳」
「スライダーと言ってください」
「多分お前が言いたいのはスレンダーだ」
「こいつ、天然か?確信犯なのか?」
「そんな事を思っていると、猫島と目が合った。
その途端、
「見つめ合っとうと」
唐突に猫島が歌い出した。
「歌うな、J A O R A K 表記が面倒臭い」
「サザンオーオスターズを馬鹿にししないで下さいっ!」
「馬鹿にはしていない!」

なんかついこの間もこんな感じの会話をした気が。

「今は亡きサザンオールスターズ…」

「死んだみたいに言うなよ！」

「サザンオールスターズはあたし達の心の中で、ずっと生き続けるでしょう…」

「サザ○は無期限活動停止しただけだっつー!!」

鈴木竜也16歳、魂の叫び、みたいな。どちらも似たようなものだろう、という意見はこの際無視で。

「まあまあ、落ち着いてくださいっ!!」

「誰のせいだと思ってる!!」

人事のように言ってくれやがって…。

「ちっ、人がせっかく下手に出てやったっていうのに…」

「あれ!?グレた!?!」

僕、そんな悪いことしましたっけ。

「ジャンピング土下座したら許してあげます」

「何を?」

「スライディング土下座でも可、ですっ!!」

「どっちも出来ねえよ!!」

「じゃあ切腹していただきましょうか」

「だからなんでだよ!あと、どこから『じゃあ』につながるんだ!そもそも死ぬって!それ絶対僕死んじゃうって!!」

一つの台詞で三つも突っ込みどころを作るんじゃねえよ。

面倒臭いから。

「ちなみに、度胸のある人は、自分の腸を引きずりだして、手で掲げて死ぬそうですよ」

「要らない豆知識っ!!」

第三話 その3

「と、いう事で、僕はもう行くから」

「じゃああたしもついて行きますっ!」

「そついやこいつ、見学に来たハズなんだよなあ……」

しかしこいつも微妙な時期に来たもんだ。今は4月末。部活体験・部活見学は既に終わっている。

後ろで暢気に鼻歌を歌っている猫島を尻目に、僕は部室のドアを開ける。

「あら、遅かったわね、竜也」

早速部長が声を掛けてくる。

「ちよつと先生に呼び止められまして」

そつ答えつつ、手で廊下にいる猫島に合図を送り、部室の中に招き入れる。

「ところでどうしたの、その娘？」

「怪訝そつに部長が言っつ。」

「入部希望者だそつですよ？」

「小学生が？」

「高一だそつで」

「……………」

「ぶ、部長さん!あたしのことを哀れむような眼差しで見ないでくださいっ!」

「(ポンポン)」

「ドンマイ、的な感じであたしの肩を叩かないでくださいっ!」

部長が僕の方に向き直って言っつ。

「そついえば竜、一つ質問があるのだけれど」

「あたしのことスルーですか!？」

シヨックを受けた感じの猫島は当然のように無視して、僕は話を

続ける。

「何ですか？」

「竜つて剣、使える？」

「はい？……まあ、一応は」

突然何を。

「私たちが次にやる台本のテストよ。剣を上手に振るえることが主人公に必要な条件なのよ。当然竜にもやってもらってから覚悟しておきなさい」

「……了解です」「そういえば、あなたの名前は？私は演劇部部长の相沢華。御覧のとおり演劇少女よ」

「無理矢理、某文学少女風にしないでいいですから！」

「じゃあ……」

そして軽く溜めてから言った。

「三年二組、相沢華。ただの人間には興味ありませんこの中に……もがつ！？」

「さすがにそのネタは古いですし色々アウトです！」

「いきなり何すんのよ！」

まあいいわ、そんな事よりあなたの名前は？」

「一年の猫島美玖と言いますっ！よろしく願いますっ！」

その後、猫島は演劇部へと入部することが決定した。今日は金曜なので、猫島が正式に演劇部に入部するのは次回の練習日である月曜日の事となる。

第三話・了

第三話 その3（後書き）

すみません、一日間が空いてしまいました……。

ヘンティカンヘンタイ！（挨拶）、斎藤一樹です。「ヘンティカンヘンタイ」について知りたい方は、「変態王子と笑わない猫」第一巻の後書きをご覧ください。

さて、今回の後半部分は元原稿からアレンジを加えられたものです。というか、ごっそり削り取られています。その削り取られたものに大幅な加筆修正を加えたものが次話となる予定です。

今回は、恐らく「演劇部内・最強決定戦」みたいなノリになると思われます。

…予定通り進めば。

D a i l y S S ! 0 3 (前書き)

更に新キャラ登場です。

これは、鈴木竜也が高校二年生の頃の話。

ある日、僕が学校から家に帰ると、

「お帰りなさいあなた〜、ご飯にする？お風呂にする？それとも、
タ・ワ・シ〜？」

「斬新すぎるっ!?!？」

姉さんに、かなり珍しい部類に入るのであろう挨拶(?)で出迎えられた。

僕には姉さんと妹が一人ずついる。

すすきありす鈴木有栖、と言うのが姉の名前で、妹の名前は鈴木凜^{すすきりん}と言う。

姉さんは僕より一つ年上で、同じ学校に通っている。妹の凜は僕より二つ年下で、今、中学三年生だ。

「タワシで何する気!?!？」

「う〜ん〜？」

「そこで悩むなよ!！」

たぶん、特に何も考えずにボケたんだろうなあ……。いや、ボケた自覚さえない可能性もあるな。

「そついや凜は？」

「今、着替え中のハズよ〜?上手くすれば覗けるかも〜」

「覗かねえよ!！」

僕を何だと思ってるんだ。

少なくとも、妹の裸を見て悦ぶような変態ではない、と思う。

そうであってくれ。

そんなことを思いつつ自分の部屋の前までくると、突然と隣の部

屋のドアがガチャリと開き、凧が出てきた。

「あ、お帰りなさい、お兄ちゃん」

「ただいま、凧」

挨拶を交わし、僕は自分の部屋に入って私服へと着替える。

二十分程たった頃、

「ご飯出来たよ、お兄ちゃん？」

という凧の声に、僕は台所に向かう。

「今日は竜ちゃんの好きなハンバーグよ」

という姉さんの言葉通り、今日のメインディッシュはハンバーグのようだ。

「……いただきます」

三人揃って食べ始める。我が家には両親がいない。

父さんは海外に単身赴任中で、再婚した母さんはそんな父さんについて外国に行ってしまった。

ちなみに、父さんと母さんが再婚したのは僕が小学三年生の時で、その時に僕には義理の姉と妹が出来た。それまでは僕は一人っ子だったのだ。

そんな彼女達のおかげで、僕はツツコミの力を鍛えることが出来た。

いや、落ち着いて考えてみると、あんまり嬉しくないぞ、これ……。

「竜ちゃん、お風呂が入ったわよ」

「りょーかい」

「一緒に入るうね」

「何で!？」

「あ、お姉ちゃんだけずるい!」

「いや、そういう問題なのか!??っていつかずるいつて何が!??」

「凧も一緒に入る!」

「落ち着け、うちの風呂場はそんなに広くない！」

いや、むしろ落ち着け僕！何か混乱して変な事言った気がするぞ
!??

っっていうか、

「一人で入らせるーっ！」

「「えーっ（泣）」」

「何でそんなに不満そうなのか、僕には理解出来ねえよ!!」

「……………鈍感……………」

「え、何で!？」

ショートストーリー04了

D a i l y S S ! 0 3 (後書き)

有栖と凜は、揃いも揃ってブロンコンです。因みに凜の方は軽いツンデレが入ってますが、これは私(作者)の趣味です。

活動報告の方でも述べましたが、このDailyのアクセス件数が1000を越えました。有難うございます！これからも引き続きよろしく願います！

第四話 その1（前書き）

順番的にはAnother Dailyの方を更新するべきだとは思ったのですが、どうしても先にこちらの話を決まらせてしまったのでDailyの方を更新させていただきました。

どうも、「あなたのハートのパートナー」斎藤一樹です。我ながら意味が分かりません。

今回のテーマというかスローガンは、「成華学園演劇部、最強決定戦！」とかそんな感じですよ。やっほう、何だかオラ、ワクワクしてきたぜ！

文化祭が近いもので、中々更新出来ません。本番、明後日なのに……。間に合う、のかな……。？

そんなこんなで、続きもなるべく早く更新出来るように頑張りますので。どうか見捨てないでください（土下座）。

ていうか何なのよ、このテンション。

第四話 その1

いつも通りの演劇部で、部長が突然こう言った。

「そうだ、天〇一武闘会をするわよ！」

「……は？」

そういう事になった。

理由を聞いてみると、「次の台本を作るに当たって、皆の戦闘力（苦笑）を知っておきたい」のだそうだ。ううむ、戦闘シーンが入る予感。

という事で。

「第一試合、鈴木竜也VS猫島美玖！」

「ノリノリですね、部長さん！」

「ってというか部長、勝利条件って何ですか？」

「……うーん、相手に『降参』って言わせるか、審判が勝負ありと判断したら？」

「…何故に語尾が疑問形……」

「今考えたからよ」

やっぱりか。

「まあ、妥当なところだろうな」

歴先輩が頷きながら言う。

「僕も異存はありませんけどね」

という事で。

「はい、これ持って」

そう言って部長が差し出して来たのは、二本の竹刀と二つのヘルメット。猫島と僕とで一本ずつ手に取り、5メートルほどの距離を

開けて対峙する。

「始めっ！」

部長の声を合図に、試合が始まる。

「ふっふっふ……。あたしの実力、とくと見るがいいですっ！」

そう言つて、竹刀を大上段に振りかぶり、突進してくる猫島。

そして振り下ろされる竹刀を後ろに下がって避け、

「そらっ！」

僕の持っている竹刀を猫島の竹刀に横から叩きつけ、その手から弾き飛ばす。

「にやっ!？」

びつくりした顔でこちらを見てくる猫島。……踏んで来た場数が違うんだよ。これぐらい出来るさ。

その隙に、素早く踏み込み首筋に竹刀を突き付ける。勿論、寸止め。

「はい、そこまで。竜也の勝ち！」

楽勝だった。

「第二試合、美影優VS春原蘭！」

お、珍しい取り合わせだ。優さんの綺麗な正眼の構えに対して、春原はゲームとかで見えるような変わった構えだ。…優さん、絶対素人じゃねえな……。ただの経験者じゃない、あれはかなりの実力者だ。

「はい、始め！」

まず動いたのは優さん。

「メエーン！」

裂帛の気合いと共に、鋭い面打ちを繰り出す。

「うわっ！」

春原はそれをバク転して躲す。……え？

優さんも目を丸くしている。

「それえっ！」

そして春原は、着地すると同時に床を蹴り、優さんに向かって右手で竹刀を持って突きを放つ。うーん、フェンシングっぽい動きだな。

でもそれは悪手だ。「突きは死に突き」という言葉がある。突きという動作は、とても隙が大きい。突きを放った瞬間、胴体はがら空きとなり、そこにカウンターを受けてしまう、というわけだ。

素人同士のチャンバラ程度なら問題にはならないものの、優さんは恐らくかなりの上級者だ。その隙は致命的。

「ハアーツ！」

優さんの横薙ぎの一撃が春原の胴に綺麗に決まり、優さんの勝利。言うまでもなく寸止めだ。

…優さん、あんなに強いとは思わなかった。

第四話 その2

第三試合は部長と天宮。普通に部長が勝った。…というか、天宮が弱すぎた。

第四試合は暦先輩と猫島。暦先輩の勝利。

第五試合は、優さんと部長。優さんの面打ちが綺麗に決まり、優さんの勝利。

それから更に3試合を経て、

「第九試合、鈴木竜也VS美影優！」

とうとう優さんと戦うことになった。

「始めっ！」

部長の合図が響く。

暫くは、お互いに殆ど動かない。ただ、視線と竹刀の細かな動きで互いに牽制し合う。そして数秒後、

「いくわよっ！」

と言いつつ、優さんが竹刀を大上段に振りかぶりつつ突撃してきた。そしてそこからの袈裟斬り。半身になって僕はそれを躲す。

かなり速い。でも、勝てないほどじゃあ無い！

続いて、返す刀で繰り出される横薙ぎの一撃を、バックステップで躲す。

恐らく、彼女の強みはスピード。女子だし、見た目からして力が特別強そうにも見えない。

なら。

避けるんじゃなくて捌いて受けていけばいい。

上段からの斬撃（竹刀だから打撃か？）を、僕は竹刀を当てて軌道を斜め下にそらす。そしてがら空きになっている顔面に竹刀を振り下ろす。しかし、その竹刀は優さんの持つ竹刀で弾かれる。優さんは、下へと受け流された竹刀の、返す刀で僕の竹刀を弾いたのだ。

「…へえ……」

これは、意外と余裕ぶつてもいられないかもしれない。何げに力は強いのもしれなかった。それとも遠心力とかの応用なのかもしれない。

油断大敵、と言ったところか。さて。

「反撃、開始というか」

僕はニヤリと嗤って、そう嘯いた。

腰を落とし、左足を軽く前に出して、竹刀を右腰で下段に構える。右手で柄を握り、左手は手の平を柄頭に添える様にする。

気合い一閃、優さんは上段からの一撃を繰り出す。僕はそれを、後ろ足である右足を左足の一直線上にそろえて半身になることで躲す。

優さんの一撃は空を斬る。

ガードが開いたその胴に、僕は横薙の一撃を放つ。

優さんは後ろへと躲す。

そこに僕は更に踏み込んで、上段からの一撃を牽制として放つ。

それを躲すべく、更に大きく後ろに下がる優さん。

…狙い通り。僕が待っていたのは、ここで生じる隙。

今までは、ほとんど至近距離での連撃だったので、僕がいくら避けようとも優さんは追撃してくる事が出来た。しかし。

優さんが自分から下がったのなら、最短でも着地してからしか近付かれることはない。更に、着地の瞬間には大分隙が出来易い。

僕は優さんが着地する瞬間、優さんに竹刀を投擲した。

辛うじてそれを弾く優さん。しかし、それも予定通り。

僕は竹刀を投擲すると同時に、優さんにむかってダッシュ。

何とか体勢を立て直した優さんは、僕に向かって竹刀を横薙ぎに振る。

僕はそれを、走っている事により生じた運動エネルギーを殺さぬよう、前転で躲し、優さんの懐に潜り込んだところで立ち上がり、「失礼します、優さん」

トン、と腹部に優しく掌底を放つ。ドン、と叩くようにするのはなく、グツと優しく押すような形で。

押されてよろめく優さん。

更に踏み込み、手刀で優さんが持っている竹刀を弾き飛ばす。

間髪入れず、続けて足払いを掛けて、優さんを床へ押し倒す。

足払いを掛けると同時に優さんの手を掴み、強く床に体を打ち付け
ないよう支えることも忘れない。

床へと倒れた優さんの首筋に、僕は手刀を突き付けて、僕は言う。

「チエツクメイトです、優さん」

「こ、降参よ、竜君……」

決着。

第四話 その3

暦先輩と部長は以前の僕を知っているからそれほど驚いてはいなかったみたいだけど、それ以外の全員はポカーン状態だった。

そこまで驚かれても。

それから更に五回戦ってから、今日のところはお開きとなった。

翌日の放課後。昨日途中で下校時間になってしまい全ての試合が出来なかった為、今日もまた天〇一武闘会である。

「しっかしまあ、天下一武〇会ってトーナメント制じゃあなかったか？」

僕の記憶が正しければ。

「まあ、部長の言うことだからね……」

隣を歩いている春原が、苦笑混じりで答えた。ああ、納得。

部室棟に入り、演劇部室のドアを開ける。既に他の部員は集まっていた。どうやら僕たちが最後だったらしい。

遅れてすみません、と謝りつつ部室に入る。さあ、部活の時間だ。

「第十五試合、神林暦VS美影優！」

おお、いきなりこの組み合わせか。楽しみだ。

「始めっ！」

まず、優さんが動いた。竹刀を上段に振りかぶり、一息に暦先輩の目の前へと迫る。

「せええエーいッ！」

気合いと共に振り下ろされた竹刀を、暦先輩は半身になることで躲かし、

「そらよ、っと」

そのまま加速して優さんの後ろに回り込み、バットを振るように竹刀をフルスイングする。

手を抜いてるな、暦先輩。

「っ！」

優さんは恐らく反射的にだろう、下段から竹刀を振り上げ、それを受け止めた。暦先輩は後ろに下がって距離を取る。

優さんは素早く暦先輩に向き直り、そのまま暦先輩に横薙ぎの一撃を放つ。暦先輩はそれをしゃがみ込んでかわし、横に転がって距離を取ろうとするが、優さんはそれを更に追撃する。横に後ろに転がって逃げる暦先輩。

5分後。

「……もう！いい加減に、攻撃するなり負けるなりしてよ〜！」

喚くように、優さんが叫んだ。暦先輩はというと、未だに返す躲かし続けている。…逆にすごくないか、あれって？

対する暦先輩はというと、

「……しょうがないか」

そう呟くと、

「はッ！」

短い気合いと共に踏み込み、優さんに面打ちを打ち込む。しかし、

「やあッ！」

優さんはそれを紙一重で避け、カウンターで暦先輩の胴を薙いだ。優さんの竹刀は、暦先輩の腹部に吸い込まれるように命中した。

「ぐえっ」

そう、命中した。

「っ、ごめんね、暦君！！」

慌てたように優さんが言う。ずっと暦先輩が避け続けるものだから、手加減をするのを忘れてしまっていたのかも知れない。

そんなこんなで、優さんの勝利。

でも、暦先輩の最後の一撃。あれは、本気の一撃だったのだろうか？

そして。

「最終試合、神林暦VS鈴木竜也！」

……大トリじゃねえか。

第四話 その4

最終試合は、僕と暦先輩。

お互いに竹刀を構え、お互いに「邪魔だから」とヘルメットを外し、5メートル程の間隔を開けて対峙する。

暦先輩が口を開く。

「久しぶりだな、竜也とこうしてやり合うのも」

僕も答える。

「そうですね、……三年ぶりですか？」

暦先輩は頷き、

「そうだな……。んじゃ、そろそろ始めるか」

と言った。

「そうしましょう」

僕の声を受け、暦先輩が部長に言う。

「華、合図を」

促され、部長は始まりを告げる。

「第六試合、始め！」

そして、戦いの火蓋が切って落とされた。

お互いに勢いよく飛び出し、ちょうど真ん中で竹刀と竹刀をぶつけ合う。数瞬の鏝迫り合いの後にお互いに2、3歩離れ、再び竹刀を振るう。暦先輩の振り下ろした竹刀に横から竹刀をぶつけて弾いて軌道を逸らし、返す刀で今度はこちらから逆袈裟に斬り上げる。しかしそれは、暦先輩の横からの一撃に受け止められる。

更に数度打ち合い、再び同時に距離を取る。

ああ、楽しいなあ！ゾクゾクしてくる。

「…更に強くなってないか、お前？」

暦先輩が呆れた様に言う。

「貴方ほどじゃありませんよ。そもそも暦先輩、得意なのは格闘戦じゃないでしょうに」

僕も言い返す。

「ま、俺も色々あったからな……」

どこか遠い目をしてしみじみと言う暦先輩。

「それは僕も同じですよ」

そう答え、再び竹刀を構える。暦先輩もそれを見て、竹刀を構え直す。

そして、再びの鏝迫り合い。

「だからこそ、負けるわけにはいかない。そうだろ、竜也！」

暦先輩が鏝迫り合いの状態のまま、蹴りを繰り出しつつ言う。それに対して、

「ええ、全くです！」

応えつつバックステップでそれをかわし、そこから逆に踏み込み、暦先輩の頭部に思いつ切り竹刀を振り下ろす。半身になってそれを避け、そのまま三連突きで牽制してくる暦先輩。また距離を取る。こうして突いてからすぐ引き戻されると、先程春原がやったような隙が殆ど生まれない。

試合を始める前と同じ位置にそれぞれ戻ったところで、暦先輩がまたも口を開く。

「……さて、そろそろウォーミングアップは終わりでもいいか、竜也？」

部長達が「え？」という顔をした。……どうしたんだろう？まあいいか。

「はい、そろそろ身体もほぐれて来ましたし」

僕が答えると、

「んじゃあ、そろそろ始めようか」

と暦先輩が言う。…うん、久しぶりにいい運動が出来そうだ。抑え切れない興奮に、思わず唇の端が吊り上がる。

「…本気でいきますよ……？」

「ああ、本気で来……あ、ちょっと待て」

「どうしました？」

「…本気でやりたいのは山々だが、多分お互い派手に怪我しそうだから少しセーブしよう」

「……そうですね」

ま、しょうがないか。お互いに本気で戦えば、少なくとも骨折は免れないだろうし。しかし、どうにも締まらない話ではある。

「んじゃ、改めて。始めようぜ、竜也」

「望むところです。……鈴木竜也、推して参る！」

「来いよ、竜也。俺の今使える総てで、迎え撃つてやんよ。……神林曆、撃滅する！」

そして僕たちは同時に、相手に向かってブーメランの様に竹刀を投げ付けた。

第四話 その5

僕や暦先輩の戦い方は、チェスや将棋等の戦術に似ている。相手の思考を読み、フエイントで揺さぶりをかけ、視線や拳動で牽制しあい、拳や蹴りが飛んでくると予想した箇所腕等を置いておいて弾き、防ぐ。

故に。

牽制として、更に相手も同じ様に竹刀を投擲してきた時の迎撃として、攻防一体のこの行動を取るということは、ある意味予定調和のようなものだったのかもしれない。

そして僕たちは、竹刀を投擲すると同時に、お互いに向かって駆け出した。

竹刀は、お互いにぶつかり合って左右に弾け飛んでいく。それを尻目に、僕と暦先輩は更に加速し、同時に相手の顔面に拳を繰り出す。僕は首を思いっきり傾けることでそれを避ける。見ると、暦先輩も同じ様にして僕の拳を躲わしていた。

お互いに距離を取り、構え直す。先に動いたのは僕。一気に踏み込み、ボディーブローを打ち込む。腕をクロスさせてガードする暦先輩に、それによってガードがから空きになっている頭部に回し蹴りを放つ。

暦先輩はそれを少しだけ屈んで避けると、そこから僕の軸足に足払いをかけてバランスを崩し、そのまま投げ飛ばされた。技は大腰かな？ちゃんと腕を掴んで頭を打たないようにもしてくれている。

いやはや。

「実に面白い」

体勢を立て直し、距離を取ってからフレミングの右手の法則の形をさせた右手を顔にあて、そう呟く。

「ネタが古い」

ダメ出しされてしまった。厳しいなあ。気を取り直して。

「まあ、楽しいのは本当ですよ」
そう言う。

「……竜也、また狂戦士状態ベルセルクに戻ってねえだろうな？」
どこか心配そうな顔で暦先輩が言う。

「大丈夫ですよ、この位」
多分、だけれど。久しぶりに軽く本気を出したから、少しマズいかも知れないけれど。

まあ、恐らくその時には、目の前にいるこの人（暦先輩）が何とかしてくれるだろう。三年前のあの時の様に。

そして、戦いは尚も続く。

「うおおおっ！」

「おらあああっ！」

殴り、捌き、蹴り、受け、数え切れないほどの攻防の応酬を繰り広げる。殆ど本能的に、反射的に身体を動かし、間断なく動き続ける。

そして。

暦先輩の大振りなフックをしゃがみ込んで躲かし、そのまま床に両手を着いて両足を宙へ上げる。逆立ちのような恰好のまま、腕を軸に脚を振り回す。

「…カポエラ!？」

驚きながらも暦先輩は両腕で蹴りをブロックする。しかし僕はそれを気にも留めず、そのまま連続して回し蹴りを放ち続ける。

何度か打った頃、暦先輩に右足を掴まれた。僕は床から両手を離し、腹筋を使って掴まれた右足を身体に引き寄せる。

その結果。

ゴチンッ

思いつきり暦先輩の額に頭突きをかました。

「痛えっ!?!」

曆先輩が悲鳴を上げる。かく言う僕もノーダメージとはいかなかった。目から少々汗が滲み出ただけ言っておこう。

そしてそのまま、

「これで、終わりだッ!」

右ジャブ、左ストレート、右回し蹴り、左後ろ回し蹴り、右ストレート。

格ゲーのコンボのように連続攻撃を曆先輩に当てる。

「……降参、だな」

肩を竦めて曆先輩が言った。……今回は勝てたな。これで、一勝一敗だ。

後日談。

「うがあっ! か、身体が……ッ!」

曆先輩は僕と戦った翌日、大変酷い筋肉痛に悩まされたという……。

「ちょ、華、やめろ!そこを触るな!ほら竜也も見てないでこいつを止め……アーッ!」

第四話・了

第四話 その5（後書き）

今回の没ネタ

「行くぞ、竜也あ！」

曆先輩が叫ぶ。…このノリは！

「曆先輩ッ！」

彼の意図を察し、僕も負けじと叫び返す。

「流派・東方不敗は！」

お互いに拳をぶつけ合う。

「王者の風よ！」

そして、次第にそのスピードが速くなっていく。

「全新！」

「系列！」

「天破侠乱！！！」

更に加速していき、最後に叫びながら、全力で一発ぶつける！

「見よ、東方は赤く燃えているッ！！！」

…指の骨が折れるかと思いました。特に最後の一撃。 b y 竜也

どもども、斎藤一樹です。

今回の話は、優さんVS竜也の部分以外は書き下ろしです。竜也くんが黒いです。

さて、解説でもしましょうか。まず最初に言うておくと、少なくとも格闘において、最強は竜也です。

曆君は基本的には射撃専門。まあ、修羅場くぐり抜けたりしてるので格闘も一応はこなせますが。拳銃使ってナイフ相手に格闘戦したりもしますが、狙撃・速射などが得意です。射撃系統は曆が最強。

優さんに至っては剣道の師範代レベル。実はかなり強いです。相手が竜也や暦じゃなければもっと活躍できた事でしょう。

暦VS優 について

本編では描かれていませんが、暦と優は本編の時点では恋人同士です。かなりのラブラブな感じのカップルです。リア充爆散しろとか言われそうなくらい。

本編の方は鈍感大魔神こと竜也視点で話が進むので触れられませんが(というか竜也が気がつかないので触れようが無い)、まあ気になる方は Another Daily の方をご覧くださいな。そんな訳で、暦は優相手には本気を出していません。但し、本気を出しても勝てるかどうかは別問題。

竜也VS暦 について

主人公対決。伏線っぽいものの解説をしておく、三年前にもこの二人は一度壮絶な喧嘩をしていて、辛うじてその時は暦が勝ちました。でも、暦の方がボロボロになっていた。あと、暦が口にした「狂戦士^{ベルセルク}」というのも、伏線というかなんと言うか。取り敢えず、暦が中二病に罹患した訳ではありません。

しかし長いですね、今回の後書き。過去最長じゃないでしょうか。むしろ長さ的には短編とかのレベル。

ではでは。

「あーあ、雨降ってきちゃった……」

ゴールデンウィークを目前にしたある日の部活。窓の外を眺めていた部長が、不意にそう言った。

「雨、嫌いなんですか？」

部長に聞いてみると、

「嫌いよ、髪の毛がぼさぼさになるから」

不機嫌そうにそう言った。ちなみに部長の髪型はやや茶色味のかかった癖っ毛のロング。確かに、癖っ毛というのは湿度で変化しやすいと聞いたことがある気がする。

取り敢えず、その小さな口をとがらせて可愛らしく拗ねたような表情になっている部長に少しだけ萌えた。かわいい。

いや、そうじゃなくて。

「俺は好きだけどな、雨って」

梅雨は嫌いだけどな、と付け足しつつ言う暦先輩。

なるほど、そういう人もいるのか。ちなみに僕は、特には何も感じない。その時々によって様々だ。適当だと言われても何も反論は出来ない。

「ところで皆さん傘持ってるんです？あたしは持ってないですけど」

猫島が言う。相変わらず微妙に変な日本語だ。まあそれはさておいておくとして。

「あ、俺持ってたねえ」

「私はあるわよ？」

「わたしは……」

傘を持っているのは僕と優さんと、春原と天宮だけだった。

結果。暦先輩は優さんと、僕は部長と、天宮は猫島と一緒に帰ることになった。電車に乗って別方向へと帰る春原のみ一人で帰るこ

とになった。他は、家の方向が大体同じ人同士がコンビを組んだ感じだ。

帰り道。雨足はそれほど強くはない。しとしとと、静かに降り続く。部長と二人つきりで、どこか心地よい沈黙に浸りながら歩いて行く。

「ところで竜也」

「どうしました？」

「その、ゴールデンウィークって何か予定ある？」

「……いえ、特に何も無かったような」

せいぜいが凜に「買い物に付き合っつて」と頼まれたぐらいだ。

「そ、そのっ！竜也が良かったら、なんだけど！えっと、ゴールデンウィークと一緒に映画に行かない？」

……うん、大丈夫。スケジュール的にも金銭的にも問題は無い、筈だ。

「べ、別に！無理ならいいのよ、無理なら！」

沈黙を否定と受け取ったのか、慌てたように部長が言う。顔が真っ赤になっている。

「いえ、大丈夫ですよ？僕のほうは。部長のほうこそ良いんですか？僕なんかが相手でも」

そこだけが気がかりではある。部長はかなり可愛い部類だと思う。

「竜也だから良いのよ！誰でも良いってわけじゃないわ」

そう宣った。何となく、今日の部長は子供っぽい。

「了解しました。貴女が良いなら問題無いです」

それから僕たちは、ゴールデンウィークの予定を相談しながら家路についた。

雨は、少し小降りになっていた。きつと、もうすぐ止むだろう。

D a i l y S S ! 0 4 (後書き)

遅くなつてしまい、ごめんなさいっ！

リアルが色々と忙しく、更に軽くスランプ状態なので中々書き進められない……。

肌寒い日が続きますが皆さんはお元気でしょうか？どうも、斎藤一樹です。

今回はゴールデンウィークのお話の前フリみたいなものになります。ゴールデンウィーク中の話は、次回のSSで。

……本編でゴールデンウィークを忘れてたからとか、決してそんな理由じゃありませんよ。…ホントなんだからねッ!? ツンデレ因みに第四話の時点で5月に入ってます。

それでは、なるべく早いうちに、また。

第五話 その1 Side・Ryuuya (前書き)

前話から二ヶ月以上の間が空いてしまいました。申し訳ありません！土下座の準備は出来ていますが、しかし画面の前で土下座をしたところで、読者の皆さんには見えないというジレンマ。

第五話 その1 Side: Ryuya

それは何の変哲も無い、平凡でありふれた僕の日常の中で起こった、一つのイレギュラー。本来ならば起こるはずが無かった、完全に想定外の出来事。

なんて。

色々と回りくどく、遠回しに言うてはみたけれど。

詰まる所、彼女の登場が僕の日常を少しだけ、変えてしまったと言っ事だろう。

朝、教室に入ると、クラスメイトの坂東が話し掛けてきた。

「なあ鈴木、知っているか？」

「なにをだよ」

「今日、うちのクラスに転校生が来るらしいぞ？」

「へえ。それは知らなかった。男？それとも女？」

「女だよ、それもかなりの美少女」

「ほう。実際に見たのか？」

「応よ。朝、職員室に入っていくのを見たのさ」

「それで、どうして僕らのクラスだと分かる？」

「うちの担任が案内してたからな」

「臨時で案内してたのかもしれないぜ？」

「……う……。まあそうかもしれないけどさあ……」

「それはそうと利根川、」

「利根川言っな」

「いいじゃん、僕はいいあだ名だと思っぜ？フルネームが坂東太郎だから利根川。筑紫次郎って奴と四国三郎って名前の奴探して、日本三代河川とでも名乗ったらどうだ？」

「勘弁してくれ……」

「で、その美少女転校生とやらはどんな感じの奴だった？」

「金髪で、」

「ほっ？」

「頭の両サイドで髪を縦ロールにまとめていて、」

「金髪の縦ロール？」

「ああ。それがどうかしたか？」

「いや、別に。そんな知り合いに心当たりがあったただけだ」

「お？じゃあそいつか？」

「いや、あいつは確か今アメリカに居たはずだ」

「何だ、つまらん」

「何だとは何だ、何だとは」

一人無然としていると、春原が話し掛けてきた。

「お、おはよ、鈴木。何で今朝はこんな騒がしいの？」

「おう、おはよう春原。何か、転校生が来るらしいぜ？」

答えると、

「転校生？この時期に？」

春原は不思議そうに言った。

「ああ、この五月に転校つてのもおかしな話だよな。ところで春原、顔が赤いけど大丈夫か？」

熱でもあるのかと思い、春原の額に手を当ててみる。

すると、

「うひゃうっ！」

春原が変な声を出した。

「だ、大丈夫か、春原！？何かどんどん熱くなって…おい、しっか
りしろ！」

しかし春原は返事をしない。

「おい、春原？大丈夫か！？春原っ！？」

尚も呼び掛け続けていると、同じくクラスメイトの尾島由比 お
じまゆい がやって来て言った。

「鈴木クン、蘭のことはうちに任せて？ね？」

少なくとも男である自分よりは適任だろう、と思い、僕は有り難
くその申し出を請ける事にした。

第五話 その1 Side・Ran

いつもと同じ時間に朝起きて、いつもどおりに学校に行つて。いつものみんなと学校で過ごして。

そうやって今日もいつも通りの一日になるんだろうな、と私は漠然と思つていた。

…朝のホームルームが始まるまでは。

今朝は何だか教室が騒がしい。何だろう？素直に聞いてみることにした。

どうせならこのチャンスを活かして、鈴木に話し掛けてみよう。よし、落ち着け私。深呼吸、深呼吸。うん、準備OK。なるべくさり気なく、

「お、おはよ、鈴木。にやんで今朝はこんな騒がしいの？」

「噛んだっ！？」

「おう、おはよう春原。何か、転校生が来るらしいぜ？」

「転校生？この時期に？」

よかった、気にしてないみたいだ。

「ああ、この五月に転校つてのもおかしな話だよな。ところで春原、顔が赤いけど大丈夫か？」

そう言つて鈴木は私の額に手を当てた。う、うわ、わ、わ、わひやあつ！

「うひゃうっ！」

な、何か変な声出たっ！？

「だ、大丈夫か、春原！？何かどんどん熱くなって…おい、しっかりしろ！」

す、鈴木が触っているから熱くなってるんだってば！でも私が返事をしない所為で余計鈴木は心配になったみたいで、さらに私に呼び掛けている。そんな時、親友の由比が助け船を出してくれた。

「鈴木くん、蘭のことはうちに任せて？ね？」

「あ？…ああ、分かった。…春原は大丈夫なのか？」

「大丈夫、大丈夫。オンナノコにしか分かんない感じの病気の症状だから、鈴木くんはそつとしいてあげて？ね？」

「……了解」

そういつと由比は、私のことを引っ張っていつてくれた。

少し離れた所まで来たところで、

「ありがとう由比、世界で一番目に、いや一番は鈴木だから、二番目に愛してる」

と私が言つと、由比は苦笑いしながら

「あんたも大変ねえ、蘭。鈴木クンの鈍感さはかなりハードル高いわよ？」

と言つた。私は少し頬を膨らませつつ、

「うっさい」

とだけ答えておいた。

由比は私が鈴木の方が好きなことを知っている唯一の人間だ。まあ由比に言わせると、「分かりやすいので、誰でも見れば分かるわよ」と言つ事らしいけれど。

ドアを開け、担任（平山郁夫 ひらやまいくお 29歳独身）が教室に入ってきたので、私は由比に手を振って自分の席に着いた。私の席は鈴木の前側だ。

転校生、どんな子だろう？

第五話 その2 Side: Ryuya

程なくして、担任教師の平山郁夫「(29) 独身、苦労性の草食系」が教室に入ってきた。隣の席に春原が戻ってきたので、聞いてみる。

「大丈夫か、春原？」

すると、

「だ、だだ、大丈夫大丈夫！ほらほら、こんなに元気！」

という答えが返ってきた。

：なんか、どうも春原は僕と話するとき、不自然な気がする。もしかすると嫌われているのだろうか。もしそうだったら、やだなあ、何か。同じ部活なのに。

教卓をパンパンと叩き、担任教師平山郁夫「古典担当、彼女居ない歴〓年齢」が声を張り上げる。

「えっと、知っている人も居るかもしれませんが、うちのクラスに転校生が来ることになりました」

その話ならクラス全員が知っている。

そんなクラスメイトたちの、「早くしろ」という視線を受け、担任平山は廊下に向かって、

「では、入ってきてください」

と言った。

入ってきたその少女は、確かに見事な金髪縦ロールだった。ドリルみてえ。

少女は、アメリカにいるはずのあいつによく似ていた。…まさかな。

しかし、さっき彼女と目が合った時、にっこりと微笑まれたのが妙に気になる。笑い方までそっくりだ。

「それでは自己紹介を」

という平山の声に促され、

「金城舞華　かねしろまいか　と言います。アメリカに居たので日本のことはよく分かりませんが、仲良くしてください」

と挨拶をした。

クラスメイトたちは口々に、

「え、帰国子女!？」

「かわいい!」

「彼氏いる?」

等と言っていたが、僕は一人茫然としていた。間違いない、彼女だ。彼女が、舞華が帰ってきたんだ。

舞華と目が合う。頭のどこかが必死に逃げると叫んでいる。しかし、足は固まったまま言うことを聞こうとしない。

案の定、舞華はこっちに駆け寄ってきて、

「りゅ・う・や　　っ！！」

と叫びながら抱きついてきた。

「うおっ！？」

突然のタツクルに、思わず体勢を崩す。

昔からこういうやつだったよな、と床に転がったままぼんやりと思う。なぜか僕によく懐いていて、所かまわず抱きついてきたりしていた。

ただし、成長して体重も増え、威力が向上している。不意打ちで食らったらたまったもんじゃない。あと、それ以外の色々も成長しているため、抱きつかれると何とは言わないが僕の体に当たる。

「いや本当アメリカに居る間ずっと淋しかったよ竜也に会えなくて！元気にしてた？」

「今僕は舞華に押し倒されている状態で固い床に寝ていて、とても健康に悪い状態であることを分かった上でその台詞を言っているの

か？」

そしてもっと句読点を付ける。読みにくいわ。

「いや、ごめんごめん。つい竜也に会えて嬉しくて」

「いいから今すぐ僕の上から離れる」

第五話 その2 Side・Ran

席に座ると、隣の鈴木が心配そうに

「大丈夫か、春原？」

と聞いてきた。私は少し慌てて、

「だ、ただ、大丈夫大丈夫！ほらほら、こんなに元気！」

と返事を返した。

……全くもう、調子が狂う。こうやって優しい言葉をかけてくれるのだって、別に私だからっていう理由からじゃなくて、鈴木が優しいから。あいつは基本的に誰にだって優しい。たまに意地悪言ったりしたりして悪ぶってるけど、根っこの部分がいい人過ぎるのだから。

ま、まあ、おかげで、私は鈴木が他の女の子に声をかけるたびに
はらはらするはめになるのだけれど。

平山先生が教卓をパンパンと叩きながら言う。

「えっと、知っている人も居るかもしれませんが、うちのクラスに
転校生が来ることになりました」

その話ならクラス全員が知ってるよ！

みんな、そんな感じで先生に「早くしろ」という視線を送る。そんなみんなの視線を受けて平山先生は、

「で、では入ってきてください」

と、廊下に向かって声をかけた。

入ってきたのは、金髪で不思議な髪型をした女の子だった。ああいうのを縦ロール、って言うのかな。どっかで見た気がする。ドリルとか、円錐形の何かが頭の両サイドにぶらさがっているようにも見える。

……ああ、誰かに似てると思ったら、真・〇姫十無双の曹操に似てるんだ。

「それでは自己紹介を」

という平山先生の声に促され、その女の子は黒板に自分の名前を書いて、こう言った。

「金城舞華　かねしろまいか　と言います。アメリカに居たので日本のことはよく分かりませんが、仲良くしてください」

へえ、帰国子女なんだ。

クラスメイトたちは口々に、

「かわいいー！」

「彼氏いる？」

「スリーサイズは？」

「え、帰国子女！？」

とか聞いていた。まあ、私もそんなクラスメイトたちの一人だったけれど。

私はちらりと隣の鈴木を盗み見る。どんな顔をしてるのか、ちょっと気になる。デレデレしてたらやだなあ……。

「……………？」

何か、ショックを受けた顔をしてた。……何で？

そのまま観察していると、びくっと震えて固まってしまった。なに、何なの？一体何が起きたの？

鈴木が目線の先をたどっていくと、金城さんと鈴木目が合っていることに気付いた。そしてその直後、

「りゅ・う・や　　っ！ー！」

と叫びつつ、金城さんが鈴木に抱きついた。

第五話 その3 Side: Ryuya

渋々、といった感じで起き上がる舞華。皆、突然起こった舞華の暴走に啞然としていた。そりゃそうだ。

「ねえ、鈴木と金城さんって、知り合い…なの？」

クラスメイト達の気持ちを代表するような感じで、春原が言った。

「うん、俗に言う幼なじみって奴かな。家が近所で、小3までずっと一緒だった。まあ、小4の時に舞華はアメリカに行っちゃったけどな」

「うん、舞華の実家はあつちだからね。舞華、ハーフだし」

ハーフ、という言葉に教室が再びざわめく。

僕はそれ以上の追求を避けるため（何しろ面倒臭い）、教室から逃げ出した。

放課後。

教室で二人つきり。…クラスの奴らが変な気を回したらしい。全く、余計なお世話だったの。僕と舞華は恋人でもなんでもなくて、ただの幼なじみだと言っているのに。

おかしいな、「女の子と二人つきり」「放課後の教室」っていうキーワードがあるのに、全くドキドキしない。多分、相手が舞華だからだろう。

「そういえば竜也って、何か部活とか入ってるっけ？」

「ああ、演劇部にな」

「あー、何か言ってたね、大分前に。確か中学の時もそうじゃなかった？」

「まあな」

「何、部長さん追い掛けて入部、だっけー？」

「うっせえ」

「むっ、一途だね。妬けちゃうんだよ」

「ほっとけ、それにそんなんじゃないよ」

「そうなの？」

「ああ、恋愛感情とはちょっと違う気がするんだよ」

「ふうん？」

「何っーか、あの人に対して恩を感じてるとか、そんな感じだな」

「分かるような分からないような……」

「どっちだよ」

「ねえ、演劇部、楽しい？」

「ああ。何より僕にとって居心地がいい」

「舞華も入ろうかな、演劇部」

「ほっ？」

「楽しそうだし、それにそうしたら竜也と一緒にいられるし」

「こ、こいつ……！聞いてるこっちが恥ずかしくなるような台詞をあつさり言いやがって！こ、これだからお子様はっ！」

僕は心の中のそんな思いを全く表情に出さずに答える。

「おう、いいな。演劇部は役者が不足してるんだ。歓迎するぜ？」

「ホント!?!？」

こうして、舞華の演劇部への入部が決定した。

第五話 その3 Side・Ran

悲鳴を上げて竜也が倒れる。

……うわー。アレは鳩尾にクリーンヒットしたかも知れない。痛そー。とりあえず竜也に向かってそつと手を合わせておいた。合掌。キミの事は忘れないよ、多分。

私がそんなことを思っている間にも、会話は続いている。

「いや本当アメリカに居る間ずっと淋しかったよ竜也に会えなくて！元気にしてた？」

「今僕は舞華に押し倒されている状態で固い床に寝ていて、とても健康に悪い状態であることを分かった上でその台詞を言っているのか？」

「いや、ごめんごめん。つい竜也に会えて嬉しくて」

「いいから今すぐ僕の上から離れる」

竜也が言うと、ようやく金城さんは竜也の上からしぶしぶと言った感じで離れた。

とりあえず、確認としての質問を竜也に投げ掛けてみることにした。

「ねえ、鈴木と金城さんって、知り合い…なの？」

すると、竜也は何でもないように

「うん、俗に言う幼なじみって奴かな。家が近所で、小3までずっと一緒だった。まあ、小4の時に舞華はアメリカに行っちゃったけどな」

と答えた。それに応じるように、金城さんも言う。

「うん、舞華の実家はあつちだからね。舞華、ハーフだし」

ハーフ、という言葉に教室が再びざわめく。彼女の金髪碧眼の理由が判明した。

そして、そのざわめきに紛れて竜也は、

姿を消した。

まあ、あとで竜也が逃げた理由が「追求・質問されるのが面倒臭いから」だと判明したけれど。

その日の放課後。

「えっと……、金城舞華です！これからよろしくお願いしますー！」
部室に入ると、金城さんが居た。

「へ？金城さん、何でここに？」

びつくりして、つい間抜けな声を上げてしまう。って言うか、何でここに居るのか、と言うのも随分と失礼な話だ。

むしろ何で居ちゃいけないのか、みたいなの。

「入部希望者、らしいですよ？」

美玖ちゃんが言う。とりあえず、理由は分かった。

「あ、春原さん！こんにちは」

金城さんが挨拶してくる。

「あれ？もう名前覚えてくれたの？」

転校初日なのに。と思っていたら、

「だって同じクラスでしょ？おんなじクラスの人皆もう名前覚えてたよ？」

事もなげにあっさりと言われてしまった。凡人の私とは頭の出来が違うみたいだ。ちょっと羨ましい。ま、それは置いておくとして。

「なぜ演劇部に？」

聞いてみると、

「竜也が居るから！」

無邪気そうな顔で言った。その一言に、

「「……………ッ！」「」

私と部長が激しく反応する。その様子を見て、優先輩はくすくすと笑っている。

「これが、私の日常。」

第五話 その3 Side・Ran (後書き)

あけましておめでとーございます。今年もよろしくお願いします。

「番外編」 Daily×松岡修造（前書き）

…… やっっちゃったんだZE

なんか本当、ごめんなさい。つい、深夜のノリの出来心だったんです！ 後悔はしています、でも反省と自重はしていませんが何か（キリッ）

ちなみに予約投稿です。

週が始まる月曜日の朝、朝礼に参加するべく僕達は体育館に行った。校長先生の長い話を右から左へと聞き流しつつ、ちらりと時計を見やった時、丁度校長がマイクを置いた。号令に合わせて、礼をする。続いて、副校長にマイクがバトンタッチされ（マイクのくせにバトンタッチとはこれ如何に）、副校長の事務的な声がマイクとスピーカーを通して響く。

「えー、今日から新しい先生がいらっしやる事になりました。それでは先生、自己紹介を」

騒めきが広がってゆく。

「どうも、松岡修造です」

……は？

松岡先生（笑）の話は長かった。そして。

「……何で分かってくれねえんだってとき、あるよな。でも大丈夫！俺に付いてこい！！」

その言葉で、松岡先生（苦笑）の話は終了した。

そして、その日の放課後。なぜか演劇部室に松岡修造がいた。なんか物凄いレベルの違和感が彼を中心として放たれている、気がする。僕達は劇の練習を始めた。そして、それは

「もつと、熱くなれよオツ!!」

という松岡先生の雄叫びによって中断された。スーパー説教タイムスタート。

「どうしてそこで諦めんだそこで!!」

何一つとして諦めた記憶は無いのだが。

「堂々としろ、堂々と!!」

まあ、確かに演劇においては羞恥心を捨て去り堂々と演技する事が求められるが。

「一番になるって言っただろ!?!」

まあ、どうせ成るのならそうなりたいものだ。しかしアンタに言った覚えは無い。

「でも大丈夫!!」

何を根拠に。

「俺に、付いてこい!!」

出来れば遠慮したいところだ。

「今日からお前は、富士山だ!!」

やだよ、山になんかなりたくねえよ。

ふと、遠くから僕を呼ぶ声が聞こえた気がした。それはとても微妙で、でもそれでいて無視できない響きだった。僕がその声に意識を向けると、意識が次第に薄れていく気がして。

ふと気が付くと目の前に凧の顔のどアップが。

「うわっ!?!」

「おはよう、お兄ちゃん」

何だ、夢オチか。道理で支離滅裂だった訳だ。しかし、夢の中でまで僕はツッコミ担当なのか……。猛烈にふて寝したくなってきた。まあ、寝ないけど。凧も居ることだし。

さてと。それじゃあ、今日も楽しい楽しい日常(Daily)を開始するとしよ。う。

「番外編」 Daily×松岡修造（後書き）

最後に。

……松岡修造さん、ほんとゴメンナサイ。でも大好きです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8603v/>

Daily

2012年1月10日06時46分発行